

東北地方太平洋沖地震被災地支援活動の記録

派遣職員 中嶋康人

所属 掛川市役所下水整備課

1 派遣期間

平成23年9月15日 ~ 平成23年9月24日

2 派遣先及び主な活動場所

岩手県山田町

3 支援活動の内容及び活動の状況

岩手では大槌班と山田町班に分かれた。私は山田町班の建設課に配属された。建設課は四人で動き、業務内容は仮設住宅、民間借上住宅への供給物資の配布だ。この業務は山田町役場の職員の方達とは関与していない。静岡の派遣チームによる、独立したものだ。山田町の職員の方達と連携しては、一週間で交代してしまう静岡のチームへの引き継ぎで負担を掛けてしまう。完全に独立して動く事はその観点から非常に良い仕組みだった。

静岡の派遣活動は終盤を迎えていた。最終の陣が次の27陣であるため私の陣でほぼ配り終えなければ、結局は山田町の職員に負担を掛けることになる。ラストスパートを掛ける必要があった。

供給物資の種類はストーブ、扇風機、掃除機、衣料品、食器洗剤であった。物資の種類で配布する担当を割り振り、未配布者に行き届くように管理する。

合理的方法で行う必要があった。第一段階として物資が全く行き届いていない住宅へは、案内通知を出し、時間と場所を伝え、直接取りに来て頂いた。これだけで大方配り終える事が出来た。

第二段階として来ることの出来なかった方へは、「在宅願い通知書」というものを各お宅のポストに入れた。文面は「 月 日、 時に を届けに伺うので家にいてください」といったもので、家に居ることを促すもだった。

物資の箱に番号を振り、ボックスカーに積み込んだ。積み込む順番も間違えると非効率になる為、気を付けた。

第三段階としては、未配布者が点々と散らばり始める。直接アポを取り、個別に配布をするが、これがなかなか大変である。時間を掛ける割にはなかなか数がさばけない。道に迷えば一時間に一箇所ということもあった。時間は限られていた為、焦る気持ちは募った。

最終的には、やり残した感はあるものの、ある程度は納得の出来る配布結果を得ることが出来た。27陣に気持ちよく引き継ぐ事が出来た。

活動中「静岡県」とネーミングされたゼッケンを着ていた。引き継ぎの時、ゼッケンを脱いで次の陣の方に渡すと、責任が降り、肩が軽くなるのを感じた。

建設課は山田町役場の職員の方達とは完全に独立していた為に、昼休みも私達の都合で時間を自由に設定することが出来たし、就業時間も自分達の判断で行った。計画、判断、実行全て自由にさせて頂けたのは、私達の自発性、積極性を助長した。四人の中で一番年配の方

が指揮を執り、他の三人がそれに従う形でチームワークとしては良いものであった。

他の課に配属された方達は、窓口で受け付けをしたり、図書館で本の管理をしたりしていた。現場に出て活動したのは建設課だけであった。おかげで山田町周辺の土地勘は付き、被災状況を詳しく見る事が出来た。また、仮設住宅に住む方々と話す機会にも恵まれた。そういった意味では建設課に配属されたことに感謝したい。そしてこのような貴重な経験の機会を与えて下さった、静岡県と掛川市に深く感謝したい。

4 活動を通じて感じたこと

人間の慣れとは凄いものだと感じた。最初、被災現場を見て強い衝撃を受けた。テレビで何度も見ていた光景であるが、やはり実際に見てみると違う。しかし、一週間現地で活動すると、これが当たり前の光景になり感じるものが無くなっていく。「慣れ」は人間の能力の一つだ。

被災地は日本人であれば是非一度見て欲しい光景である。スーパーや衣料店など、新しい店が出来てきている。綺麗に復興する前に、被災地を見に行くべきである。背筋が伸びる思いになる。

5 支援活動から見た被災状況など



船越小学校の体育館
(波で板が持ち上げられた)



同小学校の教室の掛け時計
(津波襲来の時間が記録されている)



高田病院の一階調理場



巨石が津波で運ばれて来た